

特性の違いも見えてきた。速度特性に合わせて対策を行うことで、より効果的な対策につなげられると考えられた。

四. ロードキル発生要因の解析と評価

ロードキルは、交通速度のほかにも様々な要因が絡み合い発生すると考えられる。しかし、どの要因がロードキルの発生に関係しているのかは情報が不足していた。これまでのロードキル発生状況を調査し、発生要因の評価を行うことで、優先的に取り組むべき対策が明らかになると考えられた。

先ほどの交通速度モデルのほか、道路のカーブ角度、道路標識・路面標示・交通事故対策の位置をGISで整理し、ヤンバルクイナとケナガネズミの事故発生地点と無事故地点の間で地理的情報に相違がないかを解析した。

その結果、高速走行箇所ほどケナガネズミのロードキルが多く発生しており、ロードキルの発生に交通速度が関係していることが示唆された(図2-A)。ケナガネズミは警戒心の薄い動物であることが知られている(引用文献参照)。この

性質のため高速走行車両から逃れることができず、多くのロードキルが発生していると推察される。

さらに、路面標示が多い箇所ほどヤンバルクイナのロードキルが少ないことから、ロードキル発生の抑制に路面標示が関係していることも示唆された(図2-B)。ここの路面標示とは、車道に設置された道路標識や舗装を指し、車道中央線や境界線等の区画線は含まない。当該区間では、すべり止め舗装が多く設置されており、特に縞模様のゼブラ方式すべり止め舗装は、その上を車が通過すると

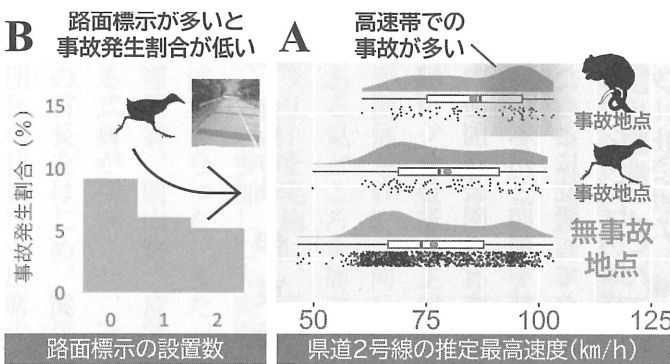


図2 ロードキル発生要因の解析結果

大きな音が鳴る。ヤンバルクイナはこの音に反応し、車との接触が避けられていると推察される。

五. 最後に

やんばる国立公園では、複数の団体がロードキル問題の解決に向けて協力関係を築き取り組んでいる。本解析は、やんばる自然保護官事務所と、NPO法人どうぶつたちの病院 沖縄による「傷病鳥獣の救護と死亡個体の回収」の成果を一部利用させていただいている。長期間にわたり詳細な事故情報が蓄積されてきたからこそ、今回の新知見を得ることができた。この結果をやんばる国立公園におけるロードキル対策の基礎情報とし、今後の取り組みへつなげていきたいと考えている。

今回紹介できなかったが、沖縄県自然保護課ではドライバー目線からの新たな対策として、「効果的な除草手法の検討」を進めている。道路脇の植生繁茂を防ぐことでドライバー視野を確保し、野生動物の接近にいち早く気付けるほか、野生動物が道路へ近づきにくくなる効果も期待される。詳細は

N E C T A N E W S 第八二号に掲載予定である。

当社はコーポレートスローガン「人と地球の未来のために」を掲げている。絶滅危惧種と人の共存により、持続可能なやんばる国立公園の姿を未来へ残せるよう、今後ともロードキル解決に向けて関係者と協働し尽力していく所存である。

※本稿は、令和六年六月二〇日・二二日に開催された第七回自然環境共生技術研究会 I C O N E C T 二〇二四(環境省自然環境局及び(社)自然環境共生技術協会共催)において、自然環境共生技術協会長賞を受賞した発表内容を元にしたものである。

引用文献:
玉那覇彰子・巨悠哉(二〇二三)九 ケナガネズミ樹上性哺乳類のロードキル 塚田英晴・園田陽一(編) 野生動物のロードキル 東京大学出版・一五二一・一六五

杉本 嵩臣●すぎもと たかおみ
いであ株式会社 沖縄支社 生態・保全 研究員。
九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室卒業後、平成三〇年入社。環境アセスメント士。沖縄県内を中心に陸域生物及び生態系に関する調査、環境影響評価、希少種保全、外来種対策等に従事。

佐藤 泰夫●さとう やすお
いであ株式会社 沖縄支社 環境技術 部長。
千葉大学大学院自然科学研究科修了後、平成一五年入社。技術士(建設部門)。自然環境の保全・創出、環境影響評価等に従事。